
BlackBreaker - 黒の破壊者 -

桜楼月華

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

BlackBreaker - 黒の破壊者 -

【Nコード】

N5706R

【作者名】

桜楼月華

【あらすじ】

違法がない世界。破壊の自由。法に裁かれず、法に守られない世界。

そんな世界の中に入ってみたくありませんか？

黒の破壊者

—— 暗いトンネルを超えた先に広がる世界がある。

その世界を知る者は怯え、この世界を知る者は喜び、あの世界を知る者は憤慨する。

知恵を持ち、同類を殺し、大地を蹂躪する『モノ』ばかり。どこを見ても感動など無く、ただ、そこら中に血を流し合う喧嘩ばかり。感動は無い。ただ、殺しの快感。興奮。感情を支配され、ある者は斬りある者は撃つ。

無意味な同類殺しをする生物など、人間以外に存在するのだろうか。

目を覚まし、いつもの小汚い空気を肺いっぱい吸い込む。そして、部屋を見渡す。

木造のぼろい、今にも崩れてしまいそうな殺風景な部屋はいつも通りだ。ちょっとした地震が来ただけで崩れるだろう。違法建築にも程がある。

だが、ここに『違法』など無い。違法が無い。即ち、法に裁かれない。しかし、法に守られることもない。それがこの世界だ。質素なベットから上体を起こし、寝癖が酷いであろう黒い髪の毛が生えている後頭部を掻き毟る。

ベットから木の床をゆっくり踏みしめるように立ちあがる。ベットのすぐ隣にタンスを開け、着替えを済ます。

数秒後、漆黒の服に身を包み腰にぶら下がる鞘に剣を収めた「少年」が部屋から出る為、ドアを開ける。

ドアを開けても尚、しつこく焦げ茶色の壊れそうな板材が敷き詰められている。その木の臭いが立ち込めるの廊下をずっと歩き、一番奥まで行くと階段がある。その階段をギシギシと音を鳴らしなが

ら下りる。

階段を下りて尚、木造。この臭いにも、もう慣れた。

そのままちよつと真つ直ぐ行くと、右側にドアがある。そこを開けると、アルコールの臭いが立ち込めた。

「お、ようやつと起きたなあ！<黒の破壊者>さん」
ブラックブレイカー

少年をく黒の破壊者>と呼んだ男は、簡素な服に身を包み、髪を重力に逆らわせてツンツンにしている。名を『アイザック・シユタイン』と言う。腰には白い鞘に日本刀が収まっている。顔の右頬には大きな傷跡が残っている。

「いい加減く黒の破壊者>って呼ぶの止めろよ。好きじゃないんだ。そういうの」

少年はへらへらしている男の顔から目線を逸らし、この木造違法建築の入り口となる扉の方を見やる。

「…誰だ？今日はヤケに人数が多いな。借金取りかなんかか？」

今度は扉から目を逸らし、カウンターにいる綺麗な黒のスーツを来た褐色の肌を持つ巨人『ビル・バーク』に問う。

ビルは苦笑し、コップを拭きながら答える。

「俺は借金をしないことで有名なバーを経営してるんだぞ。そんな訳ないだろう」

少年は「ごもつとも」、と言いながら剣を抜き、扉を見やる。

「どうする？今日は人肉パーティーとでも行くか？」

「そりゃ勘弁。俺は人肉を美味しくする方法を知らない」

少年が抜いた剣の色は黒に染まり、何とも言えない威圧感を放っている。

バーというよりは普通のレストラン風に並んだ椅子やテーブルを蹴りで退かし、邪魔にならぬようにしてから扉に向かう。その光景を見てビルが「おいおい、店の中で殺るなよ？」とさつきと変わらぬ苦笑を浮かべているが少年は気にしない様子で扉を開け放つ。

木の臭いから解放された鼻は自然を求めるかのように、肺いっぱい

いに空気を吸い込む。

そんな少年の様子を見る男たちが十数人。殆どがゴツイ体形をしている。

ある者は巨大な斧を持ち、ある者は小刀の様な小回りがよく効く刃を持っている。男たちは少年を囲むように陣形を取り不敵な笑みを浮かべている。

「今日こそはぶっ殺してやるぜ… <黒の破壊者>」

木造違法建築の中から「借金じゃなくてお前が目当てじゃねえか」というビルの声が聞こえたが、やはり少年は気にしない。黒い刀身を太陽の光に輝かせながら男たちを右から左へ、視線を巡らす。

その後、少年『エド・ブラック』は地面に接する足に力を入れ高く跳び上がり、その集団の中に入り、次々と切り裂いていった。

数十秒後、エドは何事もなかったかのような顔で戻ってきた。剣は血が滴り床に赤黒いシミを作っている。

「一暴れしたら腹減ったな…。ビル、適当に飯を作ってくれ」

「はいはい、いつものでいいんだな？」

エドは小さく頷き、アイザックの顔を見る。顎鬚と傷、ツンツン頭意外に特徴はない。

「アイザック、今度からお前が相手してやってくれよ。毎週毎週怪我が治っては押し寄せてくるんだぜ？」

「ははは。そりゃ勘弁。俺はお前と違って、バトル脳じゃないんだよ。生活に支障がでることはしない主義なのさ」

そんな話をしてる間にも、ビルは俺の朝飯を作り終える。卵とベイクンを炒めた簡単な物だが、朝はこれに限る。

「そう言えば、噂で聞いたんだけどよ。どうも、今日美少女が空から降ってくるそうだぜ」

「おいおい、そりゃあホントか？ここ最近この世界に女性は来なかったからそりゃ吃驚だ」

ビルはコップを拭きながら目を大きくしてアイザックを見やる。
「…空から降ってくるっていう冗談、スルーしないでくれないか？」
そんなことはどうでもいいとばかりに、エドはただ卵とベーコン
の炒め物を頬張り続ける。

しかし、内心は「美少女…か。ちょっと興味あるな」だった。

美少女？いいえ、守護霊です。

町はずれに存在する深い森。その奥深くにある『とあるトンネル』の前。

腕時計が示す時間は午前十一時。トンネルのゲートが開く時間。

この世界に来る方法の一つ。とあるトンネルを抜けること。時間はこの世界の十一時だが、外の世界では不特定。しかも場所も不特定なため、ここに人が来てしまった理由の殆どが偶然である。

「美少女つてのは嘘、なのかもな」

もうすぐ十一時一分になる。一分を過ぎるとゲートは閉まり、トンネルは消える。

どう見ても、誰も出てくる気配がない。やはり噂だと思い、アイザックを問い詰めてやろうと店に返ろうとした。その瞬間、急にゲートから強い光が出現した。

「あいたたた。なんか足に凄い衝撃が…」

光の出所を見ると、紅い服を纏った茶髪の女の子がしゃがみ込んでいた。美少女っていうか、少女だ。普通な感じ。髪型は短い茶髪を小さいツインテールでまとめている。歳は…分からないけど見た感じ身長は一四〇センチメートルくらいっぽい。

「あ」

エドの存在に気付いた。関わりたくない、と踵を返し帰ろうとする。だが、

「待て！」

「いてえよ。離せ」

耳を引っ張ってきた。ちなみに、結構痛い。涙出そうなくらい。何だって言うんだよ…。

「私の存在を無視しないでくれるのなら離すよ」

「分かった分かった。だから離せ」

少女は納得したように耳を離す。瞬時にエドはダッシュで店に向

かう。

「あ！ち、ちよつとお！女の子のこと置いてけぼりにするとかホントに男ですか、お前はー！」

早い。何が早いって？少女の足のことだ。これまでに色々な戦地を駆けてきたエドを数分で捕まえたのだ。背伸びをしてエドの耳を引っ張ってくる。

「もう、分かった。離せ。いろいろ聞いてやるから離せ」

実際エドは逃げる気はなかったのだが、少女は離そうとしない。オオカミ少年の気分だ。

「とりあえず、自己紹介。私は『キリカ・アルバーン』と言います。……で、キミは？」

「年上をキミ呼ばわりするんじゃない。てか離しやがれ……」

離してくれるよう説得を試みるが、やはりダメだ。しかも逆に手に力入って余計痛くなった。

「いいから名前！私が名乗ったんだから、アンタも名乗るべきだよ」

「……はあ。俺はエド・ブラックだ」

溜め息交じりの自己紹介をするとキリカは、エドの体をマジマジと見てから率直な感想を述べる。

「名前と格好似合わないね」

エドも負けじと、キリカの頬を両手で抓った。おお、プニプニしてて気持ちいい。

まあ、似合っていないというのは確かかもしれない。エドと言う名前の割には黒髪に黒眼。言ってしまうえば日本人風なのだ。長い黒髪に隠れる目や輪郭は、繊細そうな男の子だと思わせる。身長も高くない、キリカの身長より、ちよつと高いだけ。

「あうあう」

何か変な声がキリカから出てきた。見ると、抓りすぎて頬が赤く

なってる。いつの間にかエドの耳からキリカの手は離れていた。

「ああ、ごめんごめん」

と、今更な感じに謝りキリカの頬から手を離す。

「痛い痛いなのですよ〜」

両手で頬を抑えている。ああ、結構良いプニプニ感だったな。

「とりあえず、店に帰るか。…お前はどうすんの？」

一応、ということできりかに尋ねる。キリカは考える素振りを数秒見せた後、（何故か）笑顔で

「憑いていてもいいですか？」

と、尋ね返された。

「連いてくるのは良い。けど、憑いてくん。お前はなんだ？悪霊か？」

「これがビツクリ。あなたの守護霊様です」

キラキラキラと自作の効果音を口ずさみながらエドの背中に乗ってくる。はつきり言って軽い。鳥の様に骨が空洞なのか、と思ってしまうほどだった。

…てか、初対面なのに馴れ馴れしくないか？という疑問はすぐに打ち消した。どうせこういう性格なのだろう。

さて…防具どうしよう

キリ力を背負って店に帰宅したエドに待っていたのは、ビルとアイザックの驚愕の顔だった。

ビルに至っては、拭いていたコップを床に落としパリーンと甲高い音を立てている。

そして、一年にも思える数秒を超えて、時は動き出す。

「おい、おいおいおい、エド！お前、女には興味ないって顔してたのに…」

「うむ…エドもそんな歳か。あとで成人向け雑誌をお前に贈呈してやろう」

「勝手に納得するな。興味出てないし。成人向け雑誌いらねーし。てか売ってる成人向け雑誌って殆どエロくないんだよ」

「それは、お前がまだ女性の魅力に気付いていなかったからだろっ」
「そんなもんには一生気付きたくないね…」

キリ力がこの店に着く前に、エドの背中で静かに寝息を立てて眠ってしまったのは幸いだったような会話をした後真剣な顔でエドは口を開ける。

「んで、本題だけど。一晩だけでもコイツをこの店に泊らせてやってくんねーかな」

ビルは笑顔になって「OK」と答えてくれた。こういう時のビルは頼り甲斐がある。

背負っていたキリ力をビルに預からせ、カウンターの右から五番目の特定席に座る（ちなみに、カウンターには全八席ある）。ビルはキリ力を俗に言う、「お姫様だっこ」して二階へ上がる。それから部屋のドアが開く音がして、数秒後、ビルが階段から下りてきた。「驚いたな。とてつもなく軽かった。あの女の子はちゃんとした食事をしているのか？」

「しらねえよ。あいつの保護者にでも言え。…それより問題なのは

防具がないことだ」

「…確かに、そうだな」

装備（防具、武器）がない。つまり、キリ力を守る物が無い。防具が売ってある店はこの寂れた町には存在しない。

この町は周りの一部が砂漠地帯で砂埃が酷い。どこかの古びた映画の舞台の様だ。砂漠地帯の反対側に森があり、その森がこの「世界」の中心とされている。砂漠の先には、海が広がっている。外の世界ではありえない話だが、「外の世界」での常識が「この世界」では通じないのも、また、面白いところなのだ。

装備が売っている店がある町に行くには危険な道を通るのが最短距離となる。装備は、材料となる物が揃えばビルが作れるのだが（現にエドの防具、武器は全てビルが作った）、材料をとりに行くにはもつと危険な場所に行くしかない。エド一人なら行けるかもしれないが、エドだけが町に行っても仕方がない。しかし、キリ力を連れていけば危険が増す。

危険、というのは竜種^{ドラゴン}のことだ。この世界で一番怖いモノは人間。その次に竜種となっている。竜種は攻撃性が高く、積極的に火炎攻撃^{フレイムアタック}を仕掛けてくる。更に、飛行タイプだけではなく、俊足を誇る陸上タイプもいるが故に怖いこと極まりない。

そして、その町を目指すには砂漠を抜ける必要がある。砂漠には陸上での生活と接近戦に特化し『スエウィトガルス』という群れを成す小型の竜種が大量に潜んでいる。エドが本気を出せば瞬殺できる雑魚だが、キリ力を守りながらとなると、瞬殺どころか、殺すこともできなくなり逆に殺される可能性がある。

「…まあ、明日検討してみるよ。お前が作ったこの剣は『瞬黒』って言う異名があるんだぜ。ガキを守ることに徹すればなんとかなるさ」

「お前さんが行くななら俺も行こう。俺の腕が鈍ってなけりやいいが…」

ビルがおとしたコップの破片を掃除しながら言う。

「俺も行くぜ。この『影斬』の試しがてらな」

エドが持つ武器は『瞬黒』（ビルが名付けた訳ではない）と呼ばれている黒い刃を持つ刀で、鏑無しの近距離型に特化した形となっている。

ビルが持つ武器は『デモンズビースト』と呼ばれる両刃の大斧だ。その武器を扱うにはかなりの体力、筋力が必要となる。

アイザックの武器は『影斬』。日本に住んでいた剣士がこの世界に来たとき置いて逝ったらしい。その刀身は暗闇でも光って見えるほど輝いていて、スピードに特化した刃。白い鞘に収まるそれは影をも斬る業物とされている。

更に、三人はこの世界でちょっとばかり名を通す最強クラスの間なのだ。そう簡単に死にはしないだろう。

少女と少年と桜（それからベット）。何この組み合わせ。

アルコールの臭いが部屋にまで立ち込める。装備を全て外し、タンスにしまったエドは真つ白な気が早い半そでの寝巻を着こんでいた。

「酒、飲みすぎた」

言いながら、ベットのの上にある窓を開ける。心地良い風が部屋に入ってきてアルコールから解放してくれる様な感覚になる。

数十秒、あるいは数分。窓枠に肘を突き風を堪能してからベットに身を投じる。ベットは簡単な作りだが、それが心地良い眠りに誘ってくれる。

数十分後、部屋に人の気配を感じ、意識が覚醒する。気配は俺のベットの隣で立ち止った。クスクスと笑う声からして、女の様だ。…エドの知る女は少ない。故に部屋に入ってきた人の正体はすぐに気付いた。

「…なにしてんだ？」

目を開け、人影を睨む。

「うわ！？起きてたのですか！？す、すいません。最近夜遅くに帰ってくる事が多くてマスターの顔見てなかったもので…そのお…あの…」

少女は驚いて手足をバタバタと慌ただしく振り回している。

水色の長い髪の毛に黄色の瞳。頭の長いあほ毛が何とも言えない愛くるしさがある。しかも一年中マフラーを外すことがない（風呂や寝るときは除く）。外の世界のどこにいたのかが不明な少女『夜咲氷華^{きひようか}』。名前からして日本人であるはずなのだが、いろいろな部分に日本人じゃない雰囲気がある。

この世界では珍しい『属性持ち』の武器を使うのだが、エドは「

まだまだ弱い。武器の性能に頼っている」と言っている。エドと氷華が知り合ったのは、一年前。氷華が竜種^{ドラゴン}に襲われているところをエドが助けたのが出会い。その時から氷華はエドを「マスター」と呼び慕っている。何故マスターなのかは、後々。お伝えできる機会があればよろしいのですが。

その氷華は手足バタバタを止め、何故かベットのところでしゃがみ込んでエドの顔を間近で見te笑顔だった。

「…とりあえず、だ。なんか階下行って酒でも飲むか？最近話もしてなかったしな」

ベットから降り、部屋の出口となるドアに向かう途中で氷華がそれを制する。

「い、いえ。お話するのならここで…」

エドは短く「ふう」と息を吐いてから腰を掛け窓の外側を見やる。そして、ビルから貰った日本酒を器に入れることなく瓶のままぐつと傾け飲む。

この世界にも季節がある。植物も、外の世界と同じ物…主に日本の植物が多い。現在の季節は春。砂漠から来る砂埃がちょっと風情を壊してしまうが、店の外には大きな桜が生えている。その桜の中でもだんとつな大きさを誇る「しだれ桜」の周りだけは砂埃が無く、桜の花弁が舞い散っている。

「おおおおお…！」

氷華は息を漏らす。エドと桜があまりにも似合っているのだ。これで和服を着ていれば、立派な日本人である。

さつきと変わらぬ心地良い風に漆黒の髪が小さく靡く。エドの目はどこか哀愁を感じさせる。

「と、ところでマスター。き、今日は一緒に寝てもよろしいでしょうか！」「無理」

「即答ですか！」

ちよつとショックを受けたのか、氷華は俯いてしまう。

氷華とエドの背の高さは殆ど変わらない。エドは一六〇センチメ

「トル、氷華は一五五センチメートルくらいだ。氷華の年齢は一四歳。エド、一六歳。この背の低さもエドのコンプレックスの一つである。」

寝るのを拒んだ主な理由は、氷華と寝る、つまり氷華とかなり接近するということ。接近すれば嫌でも身長のことを気にしてしまう。そうなれば睡眠なんてしていられるわけがない。即、牛乳を大量に購入することだろう。

「…部屋で寝るってだけならいいけどね」

「えー…、それじゃあ意味がないっていうか…」

「なんか言ったか？」

「いえ！なんでもありません！マスターと一緒に空間に入れるだけでも幸せです！」

何故か敬礼しながらエドへの好意をむき出しにする。

氷華は自覚をしているのかしていないのか定かではないが、エドに対しデレデレなのだ。なんでも、日本人染みた風貌が何とも言えない程カッコいいとか何とか。

一方エドは、女性に興味がないどころか女心というモノが全く分からず、氷華がデレデレしていることに気付かない。そのことに対し、アイザックに一晚中女心についての知識を叩きこまれたのは記憶に新しいことだった。まあ、エドはその全てを聞き流して、日本酒をちよびちよび飲んでいたのだが。

「そ、それじゃあ。こちらに布団をお持ちしますゆえ、少々お待ちください」

そう言っただけでエドに頭を下げ、出ていこうとする氷華を今度はエドが制する。

「いや、いい。今宵は満月。更に酒が美味だからかな、機嫌がいい。俺のベットで寝な。俺はそこら辺の椅子で座って寝るさ」

最近エドが知ったことの一つ。氷華は、声を低くしてこういった口調で喋ると結構興奮する。それを見ているのがどこか面白い。

期待を裏切らず、氷華は興奮した。が、すぐ我に返りエドのス

メを断る。

「そ、そんな！マスターが風邪をひいてしまわれます！私はよろしいですから、いつも通りマスターがベットで…」

エドは戦闘で鍛えた脚力で氷華との距離を一気に縮め、人差し指を氷華の唇に当て、目を細くして言葉を制す。

「なら、一緒に寝るか？理性を失って、お前を襲うかもしれない？」

エドは冗談で言ったつもりだった。さっき説明したとおり、そんなことすれば次の日には牛乳瓶で部屋がいっぱいになってしまう。更に言えば襲う気もない。

「大丈夫です！マスターのこと信じてますから。では！」

氷華はエドの言葉を本気で受けた取っいたらしくベットに入り、エドが寝る場所を確保し笑顔で手招きまでしている。

「はあ…。まあ、今日くらいはいいか」

何故こう思ったのかは、エド本人にも分からない。とりあえず、今晩は戦いだとエドは悟った。

…なんの戦いかって？決まっている。牛乳を飲みたいという気持ちとの戦いだ。

賑やかな朝って爽やかだけど疲れる。

小鳥の囀りがエドの目を覚まさせる。意識が確かになっていくのと同時に、何らかの気配がドアにあるのを感じ、確認しようと上体を起こそうとする。が、起こせない。理由は簡単だった。氷華が、エドに覆い被さる形で寝ていたのだ。布団かよ、と思ったが口に出さずに適当に退かす。退かした際、氷華の頭が壁に当たり、ドカッという痛そうな音を立てた。本当に痛かったのだろうか、ぶつけた後頭部を両手で抑えながら「うう」と呻きながら体を丸めた。

そして、エドが上体を起こしドアの方を見ると

「……………」

「……………」

アイザックとキリカが口をパクパクしながら人差し指をエドに向かって指していた。

「なんだ？アイザックとキリカ…？何してんの」

「お前が何してるのぉおお！？」

アイザックがいつもの百倍もあるだろう素早さでエドに近寄る。

「なんだ？お前、氷華ちゃんと一夜を過ごしたのか！？この野郎、正直に吐きやがれ！」

エドの胸倉を掴み、ガクガクガクと脳を揺らす。キリカに至っては放心状態。口から魂が抜けてる様にも見える。そして魂を口から戻し、アイザックと同じくらいのスピードでエドに近づく。

「ふふふふ不潔です！女の子を襲うだなんてててて」

「何を勘違いしている。一夜を過ごしたのは事実として襲ってなんかいないぞ」

エドがそう言うとアイザックが「ぬああにいいいい！」と頭を抱えて叫んだ。

「氷華ちゃんの下承済みで一夜を過ごしたのかあああああ！」

「アイザック、落ち着け。エドはまだ十六歳だ。一夜を過ごすの意

味が分かっていない」

「十六歳なら普通意味通じるだろおお！」

「ああ、普通に過ごしていればな。だが、こいつがこの世界に来たのは三年前。まだ十三歳の頃だ」

「いや、十三歳でも通じるだろう……」

この世界に来てから性的なことに興味を持つ者は少ない。生きることでは必死だからだ。

「とりあえず、だ。今日はキリカの防具買いに行くんだろ。丁度良いじゃないか。氷華も一緒に行けば戦力増加だ。竜種を殺しながら行けるかもしれんぞ」

「そ、それは私の力を認めてくれたということでしょうか！」

いつの間にか起きていた氷華が目をキラキラと輝かせながらエドの見ていた。

「認めたわけじゃあない。……けどまあ、出会ったときよりは強くなつたんじゃないか？」

そう言うとき氷華は先程よりも目を輝かせ「マスター！」と言いながら駆けよってくる。

「うるせえ」

駆けてきた氷華を足蹴りして部屋の隅まで転がす。

その様子を見ていたアイザックとビルが小さな声で会話をする。

「……やっぱ、エドはまだ子供なんだな。あんな可愛い氷華ちゃんを足蹴りするとか……」

「ああ、子供だからあのギルドは崩れたんだ。だが……まあ、エドならその内復活する。そう信じているから、俺はあいつの近くにいないんだ」

「……やっぱ、お前はもう大人なんだな……。まさか、俺のロリコン的発言を軽くスルーとは」

「当たり前だバカ野郎。俺はもう四一だぞ。ていうかお前ロリコンだろうが」

キリカはまだエドに不潔だの何だの話をしている。それを氷華は

じーっと膨れ顔で見ている。

なんだか賑やかな朝の所為か、小鳥の囀りは消えていた。

エドの過去、なんかシリアスな空気

半年前の九月。俺は、壊れた。＜血染めの侍＞＜黒の破壊者＞。そう呼ばれるようになったのは、その壊れたときから付けられた名だ。

破壊衝動に支配され、漆黒の刃で幾つもの命を散らせた。透き通るような白い肌は赤黒く染まり、いや、もはや黒に染まっていた。破壊衝動に支配された切っ掛けが何だったのかは覚えていない。分かるのは、まだ消えない血の臭い。その破壊は敵味方関係なかった。

二年前、とあるギルドを作った。元の名は『竜種討伐隊』りゅうしゅとつたいと言う。活動内容は人を襲う竜種を人から守ること。しかし、一年前から活動内容と名前が大きく変わってしまった。

名は『江戸組』（誰が考えたかはお察しください）、活動内容は『支配』となった。この世界を『王』の支配から解放する。そして、実験を終わらせるのだ。

実験とはなんなのか、その話をするのはとても長くなる。

この世界に魔法はない。だが、魔法を発動させる鍵キとなる武器、所謂『属性持ち』が発見された。その武器は『炎龍』と呼ばれた。名前からして分かると思うが、炎を操ることができる武器であった。氷華が持つ『氷月輪』という刀もそんな魔法を操る武器のひとつだ。氷を操り、大気にある水は全て氷華の味方となってくれる。この二つの共通点は『石』だ。『氷月輪』の柄には淡い青色の宝石が埋まっている。『炎龍』も刀だ。その刃には紅く燃ゆるルビーが埋まっていたらしい。

それらの石は『魔法石』と呼ばれる。その石を人体に融合させることで魔法を操れるのではないか。そう考える王…王と呼ぶよりは『天才』バカと呼ぶ方が正しいだろう。その天才は、まず体力のある大

男に魔法石を埋めた。だが、その大男はあまりの痛みには耐えられず、死んだ。大男は「体が引き裂かれる様な痛みだ」とか「まだ死にたくない」と言いながら死んでいったらしい。

それでも尚、王は人体に魔法石を埋める実験を止めなかった。

俺の友人となった一人も、その実験の犠牲となった。竜種と仲良くできる少数の人間。ドラゴンテイマーだ。その『少女』は、俺に氷華と同じくらい好意を持っていてくれた、と思う。まだ五歳だったから、好奇心だけで動いてただけの可能性も否めないのも事実だが。

王の使いは「少女をアフロディーテの生まれ変わりとして城に二、三日招待する」と親に言ったらしい。が、事実は違った。その少女にまで、王は魔法石を埋め込ませたのだ。そして、少女は人ではなくなった。人を超越した存在となってしまうた、と親が嘆いていた。しかし、その実験に成功してしまったのは少女が十歳になる頃だった。それまでは「いろいろな問題がある」と言って実験をしなかったらしい。僅か五歳の少女を監禁したのだ。王は……。王は………！

それが、ギルドの活動内容を変えた切っ掛け。そして、今から半年前に王を追いつめるところまで行った。しかし、王は卑怯な手を使った。その場にいた氷華を人質としたのだ。そして、王は止せばいいのに、氷華の首に切り傷を負わせた。それは、俺の暴走の切っ掛けとなった。

王の仲間全員は斬り伏せ、俺の仲間も敵に見え、殺した。殺した。殺した。俺が理性を取り戻す頃には傷だらけの氷華と、俺を抑えつけていたアイザックとビル。そして何とか生き残った数人の仲間だけだった。氷華の傷は俺がやったのだとビルは教えてくれた。それを知った当初は嘆き苦しんだ。氷華を見ていると、その暴走時のことが蘇っていった。本能が記憶の中のビデオを無理矢理『俺』に見せつけるかのように。その光景は、あまりにも残酷すぎた。刀で切

るには飽き足らず、素手で内蔵を抉り、頭を潰し、四肢を裂き…。
その俺の目は既に化物の域に達していただろう。

そんな俺を、氷華はずっと励ましてくれた。そのおかげで今の俺がいる。氷華は俺をマスターと呼ぶのは、『竜種討伐隊』の時の縁だ。『江戸組』の時は、俺は和服ばかりを着せられていた。

でも、それはそれでとても楽しかった。俺はその楽しさを自分で奪ったのだ。

「おい、エド。お前さん、いつもより何か気負ってないか？」

ビルにそう言われ、エドはハッと意識を今の状況に集中させる。

「いやなに、ちよっと思いついていただけさ。気負ってはいない。ガキのお守りなんざに気負ってたら『竜種討伐隊』なんてギルド作ってられねえよ」

ビルは無言になる。エドと同じように昔を思い出しているのかもしれない。

「マスター…すごく言いたしづらいんですけど、『江戸組』を…復活させませんか？」

「…無理だ。俺は、お前を傷つけたくない……」

氷華はちよつと沈んだ顔になり「そうですか…」と言って俺の腕にしがみついてくる。

ただ一人、キリカだけ「なになに？なにこの空気」とキョロキョロさせている。店を出てから数十分。もうそろそろ、町が見えてもいい頃だ。そうなれば竜種が出てくる危険性が高くなる。集中しないと、と自分に言い聞かせ氷華に掴まれた左腕に力が入る。氷華はピクツとしてエドの顔を覗き見る。

「江戸組の再結成、か…」

エドは覗き見てくる氷華の顔を見て、考えた。今、少女は自らの力で城を出たと聞いた。ならば、もう結成する理由もない。だが、あの時の様に大きな屋敷を構えて宴会だかなんだかをやるのも、楽

しかった記憶がある。戦闘に特化させる必要はない。楽しめる『江戸組』。エドは不覚にも、それもいいかもしれない、と思ってしまう。

金楼

砂漠を抜け、何頭か単体の竜種と戦ったものの、皆無傷で町にたどり着いた。

町に入るには、町を囲うように壁が存在するため大きな門をくぐるしかない（もし壁を壊して入ると、町の警備に捕まりいろいろ尋問され、拳句の果てには王が住んでいる城の地下に一時的に閉じ込められる）。門をくぐったと言う証明するカードを持ち歩かなくては、この町には歩けない。カードには身元を書く必要がある。どの町から来たのかとか、名前とか年齢とか。

門番みたいな人から書く物を貸してもらい、エドとその他四名はカードに記入を済ます。

町は妙に活気づいている。

この町は元々安全地帯とされている。町に入ろうとする竜種は警備に銃撃され追い出されるか、殺される。この世界では数少ない平和な町なのだ。

「さて、まずは防具を買いに行こう。それから情報屋に寄ってもらう。ちよつと情報が欲しい」

そう言つて、エドを先頭とする五人組は真っ直ぐ進む。

この町は唯一、アスファルトがある町だ。言つてしまえば、日本の都会の様な町だ。しかし、歩く人は両手剣を持っていたり、腰に剣がぶら下がっていたりする故に奇妙なモノだ。

真っ直ぐ進んだ後、衣類が売られている店を曲がり薄暗く細い道に入る。

「本当にこつちでいいの…？」

キリ力が不安そうに先頭のエドに話しかける。が、エドの返事はない。無言で進み続ける。無視され少なからずショックを受けたのかキリ力は俯く。それを見てから氷華がエドの代わりに答える。

「この道の奥に武器、防具をいろんな所から集めている御方がいるのです。江戸組時代はかなりお世話になった御方なんですけどね」

「江戸組時代…？」

「深いことは帰ってからお話ししますよ」

年下だろうと思われるキリカにまで敬語を使う氷華は今日もマフラーを着用。服装は私服として着ている汚れなき雪の様に真っ白な和服に、青白い花が描かれている。その服の所為か、いつもより涼しげな雰囲気となっている。マフラーは水色のシンプルなものだ。

『氷月輪』は着物の中にしまわれている。

先頭を立つエドは簡素な白いＴシャツに黒の上着を羽織い、ジーパン。腰には黒の鞘に収まる黒の鰐がない日本刀がぶら下がっている。

そのほかの者は昨日と変わらぬ服装。…ビルはスーツの上着を一枚脱いだだけの格好だ。背中には、似合わない巨大な両刃の斧が不格好についていた。

先程まで口を開かなかったが急に立ち止り氷華がエドの背中に「あう！」ぶつかる。そしてエドの口が開く。

「…いるんだろ。金楼」

「相変わらず、だな。久しいな、エド」

壁に背中を預けたツンツンとしている黒髪に黄色と白の蝶の模様が付いている和服に、背中の巨大な剣がとつもない存在感を放っていた。これほどの存在感を放っておきながら、何故気付けなかったのか、とキリカは疑問に思った。

「限界まで存在感はなくしてた筈なんだが…、まあいい。どうした？こんな所に来るなんて」

「コイツの装備をチョイスしてくれないか。俺は装備に対する知識が浅いからな」

そう言ってキリカの背中を前へ押す。

金楼と言う男は「ほほ〜う」とキリカの全身を舐めるようにマジマジと見てから、「うむ」と何を納得したのか頷いた。

「エド、お前も隅に置けない男だな。また女の子を連れ出して…」
「見るべき場所はそこじゃない…。アイザックと同じレベルで良かったな金楼」

「ゲ…、アイザックと同レベルとか喜べねエよ…」

アイザックは後ろで「なにい!？」と大声で叫んでから金楼をジト目で見ると、

「とりあえず、この子の装備なあ…。うむ、とりあえず店に戻ろう。武器はなくとも防具は揃っている」

エドは小首を傾げて金楼に問う。

「武器がない…？何かあったのか？」

金楼は「ああ」と俯きながら語りだす。

「最近武器を万引きしていく輩がいてね。困っているんだ。故に今は武器の提供は断っているんだ」

その後小さな声で「江戸組の設備が復活すれば…」と独り言を言ったのだから、すっかりエドの耳に入ってしまった。

「…分かった。とりあえず、防具でいい。コイツを戦わせる気は無いからな」

金楼は変な微笑を浮かべながら、店への入り口へ案内してくれた。

細く暗い道を抜け、先程とは反対側の道へ出る。そこから数分歩き、また左に曲がると、酷く荒んだ装備ショップがあった。

「さて、まずはこの子の体に合わせた防具だが…。うむ、今のところ揃っている防具は五十個だ」

キリカを除いた四人は驚愕した。少ないのだ。防具の数が。前までは千個を余裕で超えていたのだが、それが今は五十個。エドはいよいよ悩みを深める。江戸組を再結成させるべきなのか、と。

キリカは「うゝん」と悩んでから「これ!」と指をさす。

キリカが選んだ防具は、俗にアーマーと呼ばれるものだと思われる。紅く飛翔する鳳凰の紋章がアーマーの中央で左右対称に羽ばた

いている。

「ほーう、お目が高いねキミ。子供のくせに」

「子供じゃないですよ！これでも十三歳なんですからね！」

「人はそれを子供と呼ぶ。…その防具は、炎の魔法石が埋め込まれた剣でしか斬れないと呼ばれている」

それを聞いたエドが難しい顔をして口を開く。

「炎龍…か。その武器以外に炎の『属性持ち』は見つかっていないはずだが…？」

「ああ、そうだな。だが、最近新たな『属性持ち』が見つかったらしい。…ま、詳しくは知らないがな」

「そうか…、その辺は情報屋にでも聞いてみるさ」

そう言っ、エドは用意していた金を払い、店を出ていってしまふ。

「お、お待ちくださいマスター」

その背中を氷華が追いかける。

「さて…俺達も行くか、ビル。金楼、急に押しかけて悪かったな。後でなんか奢ってやるよ」

そう言っ、金楼は苦笑いを浮かべ

「お前が俺に向かって優しい声で話しかけるとはな…。明日の天気は槍でも降ってきそうだ」

「丸くなったって言ってくれよ。…人の好意は素直に受け取れよう」

そうしてアイザックは右手を天に向け挙げ、「じゃあな」と言っ、店を出た。

情報屋『橙 李』

金樓の店を出てから左に進み、数分すると不動産屋の様な店がある。

しかし、ウィンドウに貼られたのは物件ではなくこの世界で起こった大きな事件から小さな情報が書かれた紙だ。

その紙を数枚見てから、エドは不動産屋もどきの中に入る。

「ん？おや、随分珍しいお客さんが来たねえ…」

茶髪のショートヘアで前髪に可愛いピンクの髪留めが付いている。服は赤いチャイナ服。髪の毛お団子（？）にしろよ、というおススメを断固拒否し続けているこの女性は『^{チェン・リー}橙 李』と言う元中国人だ。年齢は現在、二十一歳。それでも身長はエドとあまり変わらない。

「ああ、久しぶりだな、リー。最近来たのでも一か月前だしな。…今日は幾つか情報を貰いに来た。紙はいらねえ。教えてくれれば良い」

そう言つてエドは店の右端にある椅子に座る。リーもその向い側の椅子に腰かける。二人を隔てているのは豪華そうなテーブル。なんだか複雑な模様が描かれている。

「要は、無料希望つてことね。分かった。それで、なんの情報が欲しいの？」

この店のルールは情報紙一枚につき、ゴールド二枚。情報紙なしで、教えるだけなら無料となっている。こんな商売長くは続くまい、と思うかもしれない。が、これでも意外と儲けてはいるのだ。

「主に欲しい情報は『王』に関する情報だ」

リーと共にこの店を営んでいるのが『グリーズ・ナイトレイ』だ。大人な風貌を纏わせていて、エドの知り合いの中で唯一巨乳。腰まで届くブロンドを靡かせている。身長高め。一八〇センチくらいあると思われる。服はリーがススメたのだろうか、チャイナ服を着ている。

そのグリーズが紅茶とコーヒーを淹れてエドの前にコーヒーを。
リーの前に紅茶を置く。

「ゆっくりしていつてね。若頭さん」

「…どうも、グリー」

エドとグリーズ。この二人の間は昔から変な空気が流れる。いや、
一方的にエドがグリーズのことを好んでいないだけなのだが。

「『王』に関する資料、ねえ…。ああ、それなら丁度良い噂が最近
流れてるわよ」

「噂？信憑性は？」

「かなり信じられる情報よ。…あなたはあまり好ましくない情報か
もしれないけど、ね」

エドはコーヒーを一口ズズツと音を立てて啜ってから、哀愁を感じ
る瞳でリーの目を射抜く。

リーはエドと目線が合ったのに気付き、びくつと小さく肩を震わ
せる。

「…なんていう目で見るのよ」

「いや、ごめん。なんでもない。話を続けて」

リーは紅茶をエドと同じように一口啜ってから、「では」と改め
て話を始める。

「『王』は遂に魔法石を自分に埋め込んだらしいわ」

氷華がビクツと震えた。リーはそれに気付いて、「ごめんね、外
に出てた方がいいかもよ？」と気を掛ける。氷華は首を横に振って
「大丈夫です」と無理矢理な笑顔で答える。

氷華は、王がトラウマだった。傷を付けられたことではなく、エ
ドを鬼神の様な破壊者に仕立ててしまったあの王が、嫌いだった。

「…王自ら魔法石を…」

「…あなたも聞きたくない話でしょう。違う情報を話すことにする
わ」

そう言って、リーは今この世界の最有力だと思われる情報を与え
てくださった。

更に、「今日はこの町に泊っていきな。なんなら、私の家に泊っていてもいいけど?」と言ってきたので、言葉に甘えてエドと氷華、キリカ、ビル、アイザックは泊っていくことにした。

江戸組再結成！をしようか悩んでる

「部屋は三個しか用意できない。ベットは人部屋につき二つ」だそうだ。エドと氷華。ビルとアイザック。キリカとリーと言った感じになった。

時計を見ると夜の十二時。

エドはまだ寝ずに窓を開け、静まった町を見た。

昼の喧騒など、嘘だったかの様な静かさだった。今日は酒がない。だから眺めるだけにした。

「マスター、寝ないのですか？」

部屋に入って目の前のベットに寝転がり、布団に包まっている氷華がエドに問いかける。エドは氷華を数秒見てから、口を開く。

「ああ、最近なかなか眠れなくてな。金楼は江戸組の設備が欲しいと言った。リーはリーであの時の様な店を欲しているだろうな、とか考えちゃってな」

言い忘れていたが、リーも江戸組の一員だった。江戸組はかなり大きな組織だったのだ。本拠地は氷華がこれだけは譲らない！と言って和風の、しかし大きな家を拠点とした。地下があつたのでそこに武器を貯蔵したりしていた。店もその和風な家の一部に付いており、安心の設備だった。

「マスター。実は、私も寝れないんです。なんだか夢に見ちゃうんです。あの時のマスターを……。そしたら、もしかしたら今も『あのマスターになってしまっているのではないかって、不安になって」

身を振り、エドの哀愁を孕んだ目を氷華はジッと見つめる。

「だから、マスターと一緒に立ったり寝たりしていると安心できるんです。今も、いつものマスターだって思えて……」

エドはそこで一度、王が住む城が建っている方向を見やる。

——俺は、もうあんなことにはならない。あんたをぶん殴って、

それで終わりにする。

「…マスター、今日も一緒に寝ていいですか…？」

恐る恐る、という感じに聞いてくる。エドは表情を出来る限り和らげ、氷華を見つめて小さく

「特別だからな」

と、言っただけだ。

氷華は猫の様に目を細め、笑顔。そして、俺が寝る場所を確保して、「どうぞ」と。

「…氷華。お前は、江戸組の再結成を望んでいるのか…？」

布団に入りながら、氷華に問いかける。今日一日で一番聞きたいことだった。

「そりゃあ勿論ですとも。江戸組は楽しかったですから」

エドはちよつと黙りこみ、その後、「そうか」と言う。それから、優しい声で「おやすみ」と言って、氷華に背を向ける形で寝息を立て始めた。

江戸組、再結成。その前に

朝ごはんは氷華が作った目玉焼きだった。和食は何度か食ったことがあるエドだが、目玉焼きが一番好きかもしれないと思っている。朝起きたときにはもう氷華はいなかった。珍しいこともあるもんだ、とエドは髪を掻きながら考えていた。いつもなら、なるべくエドと一緒にいたいと言つてエドが起きるまでタヌキ寝入りを決めこんでいる氷華が早起きして朝ごはん等、江戸組以来の出来事だった。

味噌汁も手作り。ご飯は炊く暇がなかったとかで、店から買ってきたらしい。

「旨いなあ。氷華ちゃんのご飯、スッゲー久しぶりだったから凄く嬉しいよ」

アイザックはホントに旨そうな顔で氷華を見ながら賞賛する。氷華は「ありがとうございます」と言つてからご飯をつつく。

「…なあ、ビル。相談があるんだ。この後いいか？」

「ん？別に構わないが…」

ビルを昨晚エドが過ごした部屋へ招き、エドは椅子に座る。ビルは立つたままで、エドを見降ろしている。

「それで？なんだ、相談つてのは」

「ああ、江戸組を再結成させることにした。そこで、だ。江戸組にいた奴らを集めてほしい。その間に俺は今度こそ王を討つ」

ビルは疑問符を頭の上に出している。

「何故だ？最早、王を討つ理由はないと思うのだが。理由があつたとしても全員が揃つてからでいいだろう。何もし人数で行く必要は

――」
「俺だけで行かなきゃ意味がないんだ。俺は王に正式な決闘を申し

込む。場所は…アリーナ会場だ」

ビルは目を大きく見開き、エドを見る。それから数秒、考えてからエドに頷く。

「分かった。決闘ならまず死ぬことは確率的に少なくなるしな。それならいだろう」

「それから、あとで俺の武器に」

小さな声でビルに言った。

「…本気か？まあ止めはしないし、勿論、協力もするが…」

エドはビルを見上げ、「ありがとさん」と言ってから椅子から腰を上げ、部屋を出ていく。ビルはその背中を見て、独り言をつぶやく。

「…子供子供と思っていたが、ちゃんと成長してんだな。江戸組時代よりも、あいつは強くなった。あれなら、王にも勝てるだろう…なあ、アイザック」

そう呼ぶと、ドアが開きアイザックが入ってくる。

「よく分かったな。エドも気づいてなかったのに…」

「たぶん、エドも気づいてたと思うぞ。まあいい。近々、久しぶりの宴会つてのをするかもしれないな。酒を多く仕入れなくちゃな」

「俺も手伝うぜ、ビル」

そう言って、ビルとアイザックも部屋を出ていく。部屋には、開け放たれた窓から入ってくる風だけが残された。

部屋から出てから、皆の所に戻る前にビルはエドからエドの刀を受け取り部屋に引きこもった。

「…なあ、エド。あいつなにやってんだ？」

「…お前には関係ないから安心しろ」

エドはそれしか言わなかった。

決闘申し込み

重い足を引きずりながら、エドは城を見上げた。城の門には門番二人が立っている。エドは堂々とその門の前に立つ。

「何ものだ。名と用件を言え」

右側に立つ厳つい顔をした男が問いかける。エドは動じずに淡々と答える。

「エド・ブラック。王に決闘を申し込みきた」

「貴様……よかるう、門を通れ。王の場所は――」

「分かってるから大丈夫だ。気遣い無用ってヤツさ」

門番はそのあまり大きいとはいえない背中に険しい視線を送っていた。

エドは最上階にある王の部屋の前に立ち、深呼吸をした。そして、二回コンコンとノックをしてから部屋に入る。部屋の奥にある机に両脚を乗せ書類を読む者がいた。白髪を生やし、ひげがない顔はしかしおじさんとしてしか表現ができまい。

「……む？誰かと思えばあの時の……」

王はしわがれた声でそう言いながら腰に差していた剣を抜く。エドはそれを片手で制し、先ほどの様に淡々と言う。

「決闘をしる。場所はアリーナで今すぐにだ。この決闘に俺が勝つたら、王の座を俺に譲れ」

「貴様が負けたら？」

「あの時のことを詫びよう。お前の部下になってもいいし、自害しろと言われれば潔くそれに応じよう」

王は不敵の笑みを浮かべ、エドの黒く哀愁漂う眼球を見る。

「よかるう。その決闘、確かに引き受けた。今すぐに、というの無

理だ。なんにしる準備が必要だからな。そうだな、今から二時間後だ」

「分かった。…今日は手加減なしであの時の様に殺し合おう。死ねばそれまでの男だったということだからな。アリーナでの決闘によって死ぬ、というのはよくある話だろう？」

「そうだな。あの時の勝負、ここで白黒付けても良い頃合いだろう」

エドは王と数秒間、目での話しに興じた。壮絶な睨みあいに見えるかもしれない。だが、そんなもんじゃない。ただ、楽しんでいるのだ。あの時の様に自我を失い全てを殺す様なことはもう無いだろうと確信している。エド自身が一番、自分が成長したと理解しているのだから。

いざ決闘

二時間後、エドと王…本名を「アルバート」という老いた男は、アリーナと呼ばれる場所（まあ円状の普通の決闘状だ）に、無言で立っていた。

僅か、二時間しか経っていないのに会場の観客席には人で埋め尽くされていた。客は歓声をあげない。

黒の破壊者「エド・ブラック」。

支配者「アルバート」。

違う意味で有名な二人の決闘。歓声をあげるべきなのだとは、皆思っている。だが、二人が発するあまりの威圧感、圧迫感に喋ることを許されていない。それこそ、観戦に来たキリカや氷華、ビルやアイザックにすら許されていない。

「なあ、王…。お前は自分を許すのか…？」

口を開いたのは、エドだった。いつもの哀愁を孕んだ目で王を見る。やる。

「…許す？ 一体、何を許すのだというのだ？ 私がすることは、正義だ。許す許されるなんて言葉は我が人生にありはしない」

「そう言いながらも、お前は人の罪は許さない」

「そうだな」

エドの目から哀愁は消えていった。殺気を孕んだ、その目線だけで人を殺せるのではないだろうかと思える。そんな目。

「ならば、俺もお前を許しはしない。僅か五歳の少女を監禁したことを。そして、氷華を人質にしたことをな」

「……………」

何かが弾けた。そう思った者がいたかもしれない。だが、弾けたわけではない。交わったのだ。アルバートとエドの剣が。

最初に動いたのはエド。一瞬でアルバートとの距離を詰め、振りかぶったと思った時には既にアルバートの剣をへし折っていた。

そう、折ったのだ。交わって、そして折れた。

折れた剣は地面に突き刺さった。

「俺の勝ちだ。アルバート！」

一層低い声で静かに、憤慨する様に、殺戮する様に、轟く様に、言った。

「…つふ、ふふ…。これで終わり？ いや、いやいやいや。そんな訳にはいかんよ。まだ始まったばかりではないか」

瞬間、王の腕から炎が生まれた。それは、エドを包みこみ、その小さな影はどこかに消えてしまった。

エドは目を閉じた。

あまりの熱さからではない。エドは熱を感じられなかった。それでも、肌を焼いているのだとエドは気付き、刀の一振りで炎を払った。

「なに…？」

エドの刀から、何かが発せられていた。酷く黒いエネルギーが刀を包んだ。元が黒かった刀を更に濃い闇が包んでいく。

「お前だけが、魔法石を入れたと思うなよ…」

「…！」

アルバートは見てしまった。エドの持つ瞬黒の鞘に黒い「魔法石」が埋まっていることに。

「貴様…。貴様も邪道に落ちるとはな」

「邪道なんて言ふなよ。使うのは、一度だけだ」

そう言ってから瞬黒を振り上げた。

「終わりだ、アルバート。お前の支配者としての権力は、今を持って無くなるっ！」

斬^{ざん}つと一振り。黒いエネルギーが、空間を支配した。だが、それも一瞬で、すぐに先程までの光景に戻る。

ビル達の目に映ったのは、鞘に瞬黒を納めてるエドと、横たわる王の姿だった。最早、瞬間的なことすぎて、ビルの思考がついていけなかった。

瞬間的に、歓声があがった。が、エドは喜ぶこともせず、空を見上げた。今度は、どこか行き先を見失った旅人の様な目をしていた。「俺は、仲間を傷つけた俺が許せない。だから、お前を倒してから前へ進むと決めた。許すのではなく、受け止める。受け止めて、同じ失敗はしないように、な」

独り言のように言ったエドの言葉は、歓声の中に消えていった。

その後

この法律のない世界に来た時、俺は、何かを呪っていた。その何かが、なんなのかは覚えてない。神か。それとも運命か。

呪った理由はただ一つ。俺の日常を奪ったことだろう。

外見のせいで他人からはいろいろ言われていたが、楽しい世界だった…気がする。

分かるはずがなかった。その世界にいたエド・ブラックはもういないのだから。今、この簡素なベットで寝ているエド・ブラックは、既にあの頃のエド・ブラックではなくなっていた。

「ん……くせえな…」

酷いアルコールの臭いに目を覚ました。エドはベットを起き上ると、いつもするように窓を開けた。そこには、いつまでも枯れることのないしだれ桜が咲いていた。と、思ってる間に、豪快な笑い声が聞こえてくる。

「…はあ、静かに眠れる時間もありやしないんだからなあ。結局一晩飲み明かしたのか、あいつらは」

エドは洋服ダンスから黒いＴシャツと半ズボンを取り出し、簡単に着替えを済まして下階に行くことにした。

下階に行くと、もはや談笑ではなく騒音というに等しかった。法律がなくて良かったとしみじみ思う。

「おい、さすがにうるせえぞ」

エドはいつものお気に入り席に腰掛け、いつも通りコップを拭いているビルに言った。

「お、なんだエド。起きてたのか。…まあいいじゃねえか。会つのも久しぶりな奴だっているだろうし」

今ビルの店は潰れそうである。ただでさえ違法建築以上にぼろいの、江戸組の奴らを無理矢理押し込んだのだ。それでも、江戸組にいた人数の三分の一だというのだから驚きだ。

「マスター、起きたんですか？（これから寝顔をじっくり拝見しようとしてたのに）」

「おい氷華、心の中が丸見えなのをどうにかしろ」

エドの前にワインが置かれる。

「……ああ？」

後ろを向くと、江戸組にいた奴ら数十人がエドの存在に気付いたのだらう。集まってきていた。

「おっす！久しぶりっすね！」

「…ああ、そうだな」

無愛想に答える。ビルはそれをフォローする様に「最近、無気力極まりなくてな。王の野郎に決闘申し込んだとき、無気力も直ったと思っただけどなあ」と、言った。

「私は無気力なマスターも大好きですけどね」

何気小恥ずかしい事をサラツと言ってしまうコイツは、イタリア出身なのかもなとエドは思った。

しかし、騒がしい。騒音から爆音にレベルアップしそうだ。鼓膜が痛い。

「とりあえず、飲むならもうちょっと静かに飲めよ？俺はちょっと外出てくるから」

そう言うってから、後ろに集まってきていた人達をなんとかして退かして店の外に出た。

もう一人のBlack Breaker

店の喧騒が聞こえなくなっってから、一時間が経過しようとしていた。この世界は、元いた世界…地球よりも、とても狭い。その代わり地形を覚えやすく、迷うということもあまりない。

町を出て森に入ると、エドの周りに嫌な気配が纏わりついてきていた。

目に見えないので余計に恐怖をそそる。だが、これまでの戦闘経験。自分の力への絶対の自信。それらを持つエドは最初、恐怖を感じていたなかった。だが、纏わりつく気配が増えてきていた。立ち止れば、一気に首を持っていかれるかもしれない。否、今こうしている間にも首を取ろうとしているのではないだろうか。最早、既に首は斬られていて、それに自分が気付いていないだけなのではないだろうかという根拠もない恐怖がエドの身を包んでいた。

腰にぶら下がっている、刀の柄を握る。エドの小柄な体を潰すとはかりに重たい空気。エドにとって、王に決闘を申し込む時以来の緊張感。しかし、あの時よりもこれははるかに大きな圧迫感だった。瞬間。

右後方より、凄まじい勢いで気配が近づいてきた。

抜刀しながら右後方から来る気配を切り裂く。所謂、居合い斬りとか言うヤツである。

だが、想像もできないものがそこにあった。

「……見えない……刀……？」

斬り付けたはずのモノには傷がなく、ただ、透明の何かに防がれていた。

「それはなんだ……？ 刀か、剣か、槍か……答える。何のために俺に纏わりつく」

そう言つと、相手は「やれやれ」と言うかのように力を抜いた。

俺は刀に力を籠め相手を後方に弾き返す。

「質問の多いヤツだな。もうちょっと一つずつ質問するとか考えないのか？」

「いきなり斬りかかってくる奴に言われる筋合いじゃない」

黒い帽子を深く被ってるその男の表情は、読み取れない。ただ、唯一見える表情は口元の不敵な笑いだけだった。身長はエドよりも少しばかり大きいだけで、とても大きいとは言えない。服装は、大層な防具を身につけてる訳でもなく、黒いボロ布を見に纏っていた。ボロ布の下に來ている服も、簡素な黒いＴシャツの様だ。はっきり言って、闇討ちとか戦闘をする服装じゃない。エドも人のことは言えないが…。

しかし、異様だ。周りの気配が動く様子がない。まるで観戦しているかのようだ。

「黒の破壊者……俺がお前を、殺す」

ただ、冷たくそう言い放った男は、どこことなくエドに似ていた。

謎の男、逃亡

一度振り払ったエドだったが、男はすぐさま二度目の剣撃に入っていた。

甲高い鉄と鉄が交わる音に耳が痛くなりながらもエドは言った。

「お前が、俺を殺す？」

エドの扱う闇の如く漆黒の刀と交わる風の如く見えない刃。

「ああ、そうだ。俺がお前を殺す。お前は、生きべきじゃない」

エドは分からなかった。初対面の男に、生きべきじゃないと言われたのはこれが初めてだ。殺してやる、なら幾らでも聞いてきたのだけど……。

「分からないな。それでお前になんのメリットがあるんだ？　そもそも、その見えない刀はなんだ」

エドはあくまで冷静になることに努めた。

「メリット……か。人を殺すのにメリットを求めるのは、あの世界の話だけだと思ったんだがなあ……」

確かに、この世界で人を殺すのに理由なんてものは要らない。この世界にいるのは生きる理由を放棄した者たちでもある。生きる理由がないということは、死ぬ理由もなく、なにより殺す理由もないということだ。

「この法律のない世界に人を殺すことのメリットを求めてどうするよ」

「……まったく、どうかしてた。その通りだな。だから、俺がお前を殺したって別に良いわけだ」

エドは見えない刀を必要最低限の力で振り払った。

「ヒュッ、いいねえ……それでこそだぜ。黒の破壊者さん」

エドの綺麗な黒髪が切れた。

「な……？」

いつの間に距離を埋めたのか、黒づくめの男はエドの髪を切った

のだ。

「……オイオイ、いきなりがっかりさせんなよ？」

「……………」

「おおつとー!？」

エドは動いた。相手と同じ動作。帽子にちよつとした切れ目ができた。

防御は最大の攻撃であるように、攻撃は最大の防御である。距離を取らず攻め続けるのがエドの戦い方だったのだが……。

「へー……、まったく、不安定なヤツだなあ」

「なに？」

「ひとつの攻撃にはとてつもない集中力を発揮するが……一度集中すると、すぐに集中力が無くなり力加減、動作、反射神経、動体視力、筋肉の動かし方、思考回路、それら全てにムラがある」

エドは驚愕した。もちろん、それらが自分の弱点であると自覚してるからこそその驚愕である。

「コラー！ その不審者、マスターに手を、出すなー!」

そんな叫び声ともとれる甲高い声と共に、パキパキパキという何かが凍る音が近づいてきた。と思った瞬間、目の前の地面が凍ってスケートリンクの様になった

「おおつ?! ほほう、こりゃあ……魔法石か？」

そう、これは氷の魔法石。そして氷の魔法石を扱い、エドのことをマスターと呼ぶ女は一人しかない。

「氷華……………」

氷華は、自分の日本刀「氷月輪」を地面突き刺した体勢で「ふう

……………」と息をついた。

「マスター、ご無事ですか？」

「氷華さん、急にどうしたんですかー! ……んん？ エドさん？」

後ろからは、最近ずっと見かけていなかった気がするキリ力の顔があった。

「なんだいなんだい、俺と違って女の子にモテモテみたいだな。黒

の破壊者さん」

エドは無言でその言葉を聞き流した。代わりに、氷華に疑問を投じた。

「氷華、なにしてんだ？　こんなところで……」

「マスターが出て行くときに嫌な予感がしたんで、ついてきたんです。それで、追いついたと思ったらマスターがその男に襲われてて……」

「私はその氷華さんがどこに行くのか気になって……」

聞いてもないのに、キリカはそう言った。

「……そうか」

そして、エドは密かに驚いていた。

地面をここまで凍らす程の力を、氷華は持っていなかったはず。なのに、エドの前には正しくスケートリンクの様に氷漬けにされた地面。

エドが思っていた以上に氷華は強くなっていたのかもしれない。

「ふむ……これは戦うって雰囲気じゃあないわな。そんじゃま、ばいなら！」

男は地面を強く蹴って森の奥へと消えていった……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5706r/>

BlackBreaker - 黒の破壊者 -

2011年6月19日11時10分発行